

大学生の生活意識に関する国際比較調査

小山 悦司・赤木 恒雄・河野 昌晴・斎藤 清三*・金 龍哲**

倉敷芸術科学大学教養学部

*吉備国際大学社会学部

**広島大学教育学部

(1997年9月30日 受理)

1 はじめに

現代の大学生が、どのような価値観、人生観、学習観などを持ち活動しているかについて知ることは、来る21世紀の社会や教育を展望する上で重要な意味を有している。このような観点から、本調査研究では、異なった国や文化圏に属する大学生の生活意識や社会意識を国際的に比較することを通して、我が国の大学生の実像に迫ることをねらいとしている。

大学生を調査の対象とした理由は、昨今の大学教育改革の一環として、①大学生のニーズの多様化への対応、②国際社会で活躍できる人材の養成、③教育内容の個性化・高度化への対応などが求められており、社会の進展とともに変化する大学生のニーズをグローバルに把握する必要があるからである。このことから、大学生の生活意識や社会意識を国際的な視座から比較し、我が国の大学生にみられる特徴や問題状況を明らかにすることは意義深いものと考えられる。

大学生を対象にした生活意識や社会意識に関する先行調査は膨大な数にのぼるが、国際比較調査に絞るとその数は限られる。数少ないこの分野の先行調査には、総理府（総務庁）が1977年から5年ごとに計5回にわたって実施した「世界青年意識調査」があり、その内容や規模の大きさからみても代表的な調査として注目される。最新の「第5回世界青年意識調査」¹⁾は、諸外国の青年の相互理解の促進に必要な基礎資料を得ることを目的に、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなど計11か国において、18歳から24歳までの青年（大学生を含む13,411名）を対象として1995年に実施されている。

このほかの大学生を対象とした国際比較調査を概観すると、筆者らの目にした範囲では(1980年代以降)、日米大学生の宗教や生活意識に関する調査²⁾³⁾、日米豪大学生の意識や行動に関する調査⁴⁾⁵⁾、日韓大学生の意識や行動に関する調査⁶⁾⁷⁾⁸⁾、日中大学生の心理的特徴に関する調査⁹⁾など、その内容は多岐にわたるが、対象国は2国またはせいぜい3国にとどまっている。

そこで、本調査では、より多くの国々との比較を可能にするために、対象国を6か国に拡げて調査を実施した。調査の目的は、大学生の生活意識・社会意識にみられる特徴や問題状況を明らかにすることである。設問項目等は、前述のこの分野では代表的な「第5回世界青年意識

調査」との比較検討を可能にするために、同調査の基本的な枠組に依拠した。さらに本調査として独自の設問項目を加えている。

II 分析の視点

調査は、アメリカ合衆国（以下アメリカと略す）、フランス、チェコ共和国（以下チェコと略す）、中華人民共和国（以下中国と略す）、大韓民国（以下韓国と略す）、日本の計6か国の4年制大学在学学生を対象にして実施した（表1参照）。

調査の内容は、①基本属性（年齢、性別等）、②生活意識、③社会意識、の3領域にわたる設問項目から構成されている。①の基本属性に関する項目は、年齢・学年・性別・専門分野等である。②の生活意識とは、「人々の具体的な生活活動の連関に根ざす日常的意識」¹⁰⁾と定義されるので、本調査では大学生生活に関連した、「授業満足度」、「学習意欲の経年的推移」、「親しい友人の有無」、「最も重視する暮らし方」など8項目を設定した。③の社会意識とは、「特定の社会集団や社会的カテゴリーの中に広がっているある社会的状況についてのイメージや好み評価など」¹¹⁾と定義されるので、本調査では、「自国の社会に対する満足度」、「自国のための自己犠牲」、「自国人としての誇り」、「学卒者の社会的評価基準」など8項目を設定した。

回答者の属性を示したものが、表2のフェースシート¹²⁾である。回答者の分布をみると、①男女比や専門分野（文系・理系）は、ほぼ均等に分布しており、②国別ではフランスとチェコの回収状況（配布部数は各300部）が予想に反して低調であり、③年齢や在籍年数では、19歳から20歳の1年次と2年次生の占める比率が高くなっている。

表1 調査の概要

| | | | | |
|--------------------|---|---------------|--------|--------------|
| 対 象 国 | アメリカ、フランス、チェコ、中国、韓国、日本 | | | |
| 対 象 大 学 (計25大学) | ア メ リ カ | ハーバード大学など計5大学 | フ ラ ンス | パリ大学など計4大学 |
| | チ ェ コ | カレル大学など計6大学 | 中 国 | 北京師範大学など計3大学 |
| | 韓 国 | 京畿大学 | 日 本 | 広島大学など計6大学 |
| 方 法 等 | 質問紙法（留置または会場自記式）、1996年6月から1997年2月にかけて実施 | | | |
| 回 収 率 | 有効回答者数：2,039名 内訳：国外928名 国内1,111名 | | | |

表2 フェースシート

(人数 %)

| 性別 | 男 女 | 18 歳 | | 年 | 19 歳 | | 分 野 | 文 系 | | 1,037 52.8 | | |
|-----|--------|-------|------|-----|-------|------|---------|------|----------|------------|-----|------|
| | | 1,089 | 53.4 | | 308 | 15.1 | | 理 系 | 928 47.2 | | | |
| 国 別 | アメリカ | 136 | 6.7 | 年 齢 | 20 歳 | 532 | 在 籍 年 数 | 1 年 | 752 | 37.3 | 総 計 | |
| | フランス | 67 | 3.3 | | 21 歳 | 355 | | 17.4 | 2 年 | 725 | | 36.0 |
| | チェコ | 91 | 4.5 | | 22 歳 | 173 | | 8.5 | 3 年 | 365 | | 18.1 |
| | 中国 | 356 | 17.5 | | 23 歳 | 66 | | 3.2 | 4 年 | 106 | | 5.3 |
| | 韓国 | 176 | 8.6 | | 24 歳 | 40 | | 2.0 | 5年以上 | 67 | | 3.3 |
| | 日本 | 1,111 | 54.5 | | 25歳以上 | 131 | | 6.4 | 総 計 | 2,039 | | 100 |

III 考 察

本章では、大学生の意識にみられる特徴や問題状況を明らかにするために、生活意識に関する設問項目、すなわち「授業満足度」、「学習意欲の経年的推移」、「親しい友人の有無」、「最も重視する暮らし方」など8項目に対する調査結果について順次検討する。なお、社会意識に関する8項目の調査結果についての考察は、紙幅の関係上別稿を期したい。

(1) 授業満足度

設問の内容は、「あなたは学校（大学）の授業に満足していますか。それとも不満ですか。」（Q7）である。回答の分布をみるとアメリカ・フランス・チェコの欧米（以下欧米と記す）と、中国・韓国・日本のアジア（以下アジアと記す）で異なる傾向を示している。すなわち、欧米では、大学の授業に満足していると回答した学生が7割を越えており、とくにアメリカでは80.9%に達している。逆にアジアでは、不満と回答した学生が5割を越え、とりわけ韓国では80.8%に達しており、アメリカと好対照をなしている（図1参照）。これは、総務庁の「第5回世界青年意識調査」（以下「世界青年調査」と略す）でも、満足度の高低の順位が同一の傾向を示している。

(2) 学習意欲の経年的推移

設問の内容は、「入学した時のやる気（学習意欲）を100%と仮定した場合、現在のやる気はどの程度ですか。」（Q8）である。入学後の年数ごとに、平均得点（%）をプロットしたものが次頁の図2である。

大学入学から卒業に至るまでの学習意欲の経年的な推移は、各国とも共通に入学時にやや高く、その後下降し、2年目に最も低くなっている。そして、3年目から卒業に向けて上昇している。これは、入学時には大学生活への期待によって高く、2年目には大学生活への慣れからマンネリズムに陥り、卒業や就職が近づくるとやる気が高まる傾向がみられることを示している。

1年目から4年目までを通じての学習意欲の平均得点を国別に比較すると、中国（98.1%）

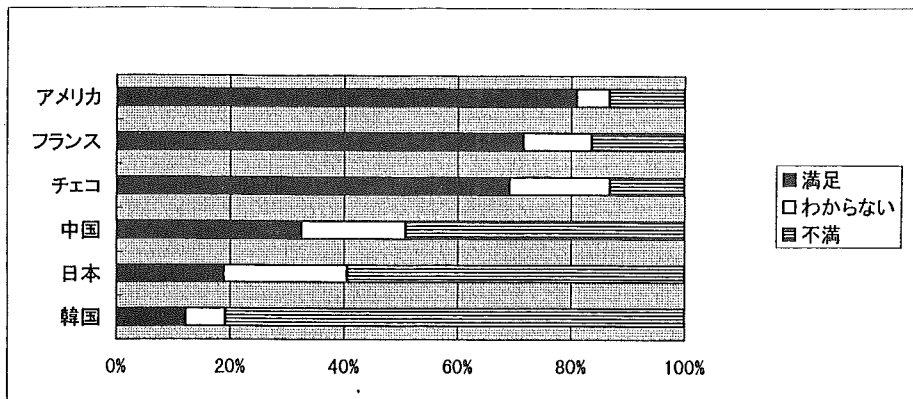


図1 学校（大学）の授業満足

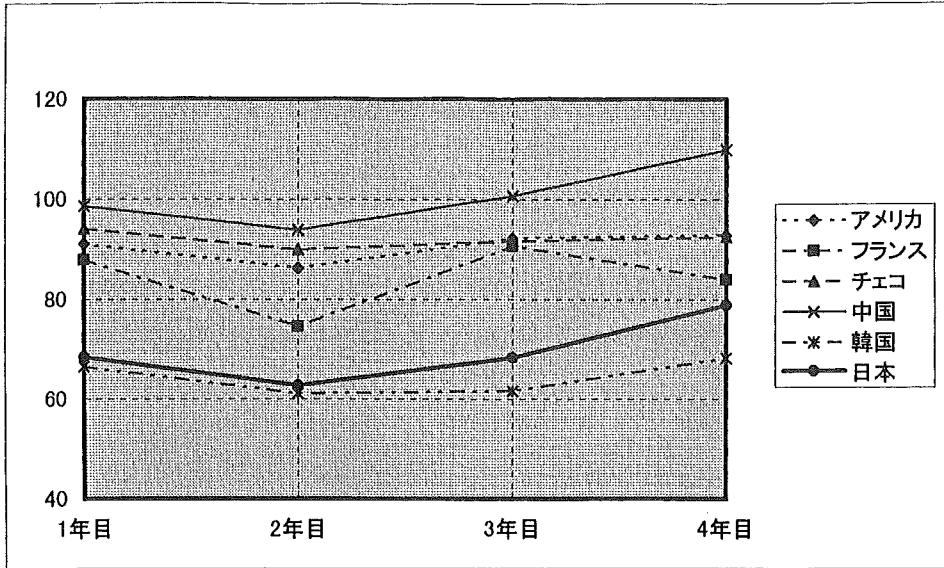


図2 学習意欲の経年的推移

アメリカ (95.1%)、チェコ (90.1%)、フランス (84.2%) の順に、比較的高く推移しているが、韓国 (65.7%) や日本 (66.6%) は入学時のやる気 (100%) に対して3分の2程度にまで下降している。これは、大学受験からの解放感と目標の喪失を同時に味わい、虚脱感にみまわれる「目標喪失虚脱感」とも呼べる現象である。

このことから、とくに日韓両国では、初等・中等教育の目標が実質的に大学入学におかれる傾向がみられ、偏差値偏重による不本意入学の比率が高いものと推測される。これを裏付けるデータとして、平成7年に実施された文部省の調査¹³⁾によれば、入学した大学を選んだ理由で最も重視したのが「入試の難易度が自分にふさわしい」との結果が得られている。

そこで、例えば大学入試制度では、学力以外の要素 (受験生の創造性や学習意欲など) を考慮するなど、大学入学への目的意識や学習関心を尊重した、多元的な選抜基準をもつ欧米の入試制度に見習う点が多いものと考えられる。また、入学後の学生に対して大学間の移動を促進させるために、編入学・転入学制度の拡充や複数大学間の単位互換制度を積極的に推進するなどの取り組みが望まれる。

(3) 親しい友人の有無

設問の内容は、「あなたは親しい友人がいますか。その友人は同性ですか、異性ですか、それとも両方ですか。」(Q9)である。友人関係に関するこの設問の回答は、欧米とアジアとで差異がみられる。同性、異性の両方の親しい友人がいるとの回答はアメリカ、フランスで多く、逆に低い数値が中国、日本と続き、最も低いのは韓国の38.2%である (図3参照)。この傾向は、「世界青年調査」でも同様で、アメリカ (78.4%) とフランス (77.1%) が高く、日本 (46.9%) と韓国 (41.5%) の順に低くなっている。

このことから、友人関係という基本的な人間関係には、欧米とは異なって、伝統や文化に根

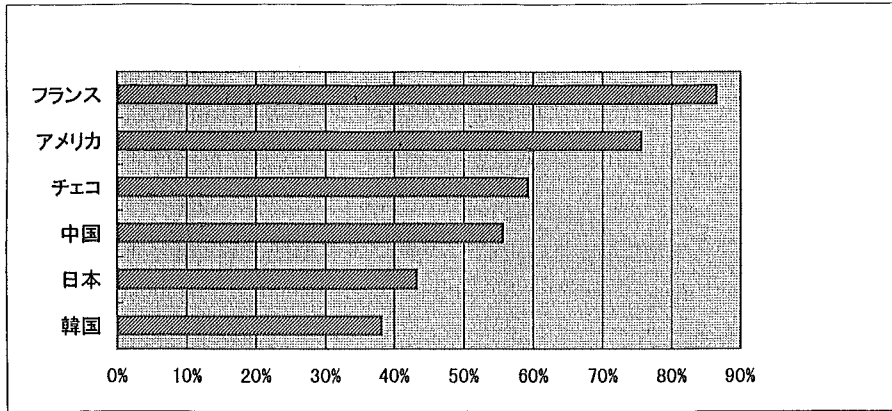


図3 親しい男女の友人がいる

ざしたアジア的な特質がみられる。武内は日韓米の友人関係を比較して、「第1に、「男女7歳にして席を同じくせず」という儒教の伝統が、心理的に今の日韓の青少年のなかにも生きている。第2に、同性のみ集う文化が日韓の国民性にある。第3に、日韓にはみあい結婚の伝統もあり、若者のなかにデート文化が十分に根付いていない。第4に、アメリカでは同性、異性という区別がそれほど意識されず、結果的に、友人のなかに異性も含まれることになるとも考えられる。」¹⁴⁾と結論づけている。アジアの女性の社会進出は活発で男女平等思想も確立してきている現代であるが、異性といえはすぐに恋愛の対象とみなしたり特別視するような意識や傾向が背景にあるのではあるまいか。

(4) 人生にとっての宗教の大切さ

設問の内容は、「人生にとって宗教はどの程度大切だと思いますか。」(Q11)である。「非常に大切」と「やや大切」を合わせて最も高い数値を示す国は韓国であり、逆に日本、チェコ、中国の順に低くなっている(図4参照)。さらに、日本の大学生は「非常に大切」という項目では中国と並んで極めて低い数値を示しており(6.0%)、現代の大学生の宗教離れの傾向を端的に表している。

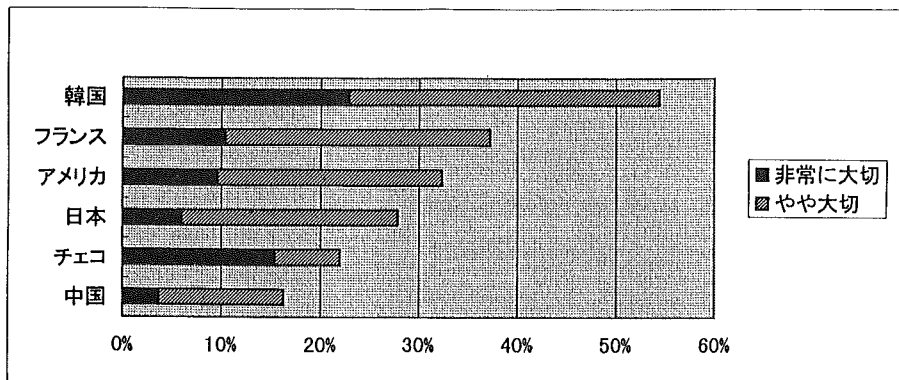


図4 人生にとっての宗教の大切さ

この傾向を「世界青年調査」と比較すれば、順位に若干の差はみられるものの、韓国（「非常に大切」24.5%、「やや大切」35.9%）や日本（「非常に大切」4.6%、「やや大切」24.4%）とほぼ同様な値を示している。また、日米豪の大学生の意識を比較した調査¹⁵⁾でも、日本の大学生で「非常に大切」と回答した者は7.3%と、国際的にみても非常に低い数値を示している。日本人には、神道、仏教、キリスト教、新興宗教など様々な宗教が併存しているが、日本人はこうした多種多様な宗教に対して、「極めて曖昧で受容的な態度を持っている」¹⁶⁾といえよう。

(5) 最も重視する暮らし方

設問の内容は「あなたが最も重視する暮らし方について、次の中から一つだけ選んで下さい。」(Q12)である。図5に示されるように、各国の大学生とも「自分の好きなように暮らす」ことを最も重視していることがわかる。さらに詳細に分析すれば、この暮らし方を支持する大学生は大きく2つに分けられる。一つはこの暮らし方を支持する割合が5割を越えて高いグループであり、一つはこれを支持する割合が30%前後と前者ほど高くなく、ほぼ同じ割合で別の項目を支持するグループである。前者には韓国(55.4%)、日本(53.7%)、フランス(50.7%)が含まれる。後者には、アメリカ(30.1%)、中国(29.5%)が含まれる。別の項目としてアメリカでは「社会への貢献」(28.7%)が、中国では「知的・教養的な向上」(30.6%)が支持されている。

日本、韓国が高い割合を占める理由の一つとしては、両国とも熾烈な受験競争社会であるために、大学に入学できた大学生は受験勉強で犠牲にしてきた自由を、大学生活に求める傾向がみられることが考えられる。

一方、アメリカの大学生は、「自分の好きなように暮らす」とほぼ同じ割合で、「社会への貢献」を挙げているが、これは1990年に行われた「日米大学生の生活実態と意識に関する調査」¹⁷⁾の結果とも符合している。この調査では、「他人のために尽くすこと」の設問に対して、日本では66%の大学生が「重要」としながら、「大変重要」と認識しているものは2割弱にとど

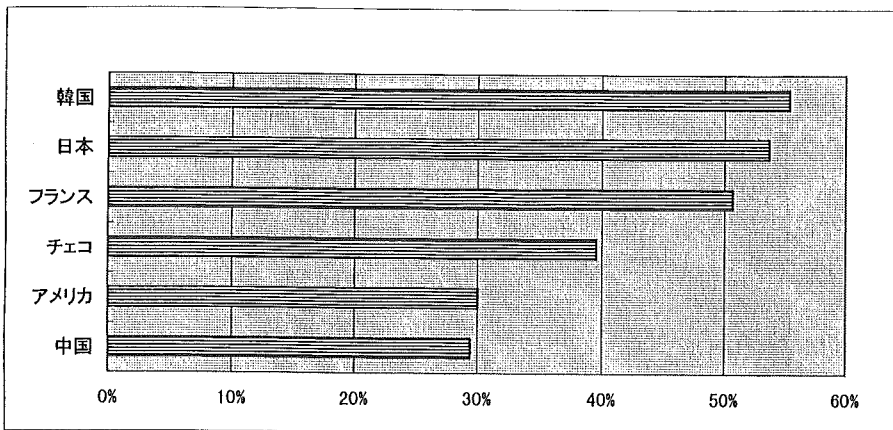


図5 好きなように暮らす

まっている。アメリカではほとんどの大学生が重要性を意識し(96.5%),さらに「大変重要」と捉えている大学生は46%もいることが明らかにされている。この「社会への貢献」が高い割合で指示される背景にはキリスト教の教えがあり,しかもアメリカ社会では高学歴あるいは上流階級の人々ほど社会貢献を求められる傾向があることと,深くかかわっているものと考えられる。

しかし,「世界青年調査」ではアメリカの青年が「社会への貢献」を支持した割合は9.6%であり,本調査や「日米大学生の生活実態と意識に関する調査」の結果と大きく異なっている。

欧米に比べて短期間に高齢化社会を迎えつつある日本においては,それへの対応としてボランティアなどの「社会への貢献」が大いに求められているが,調査によればこの項目を支持する大学生の割合は6.0%と1割にも達していない。「社会への貢献」に対する取り組み策が,今後早急に検討されなければならない。

(6) 充実感を感じているとき

設問の内容は,「あなたは,どんなときに充実感を感じますか。」(Q16)である。表3から,日本の大学生は「スポーツ・趣味に打ち込んでいるとき」(78.4%),「友達や仲間といるとき」(72.7%)に充実感を感じており,大学生の本分である「勉強をしているとき」に充実感を感じている大学生が少ない。このことは以前からいわれてきた大学のレジャーランド化を実証しているともいえよう。各国との比較でみると,日本,アメリカを除いた国々の大学生は「勉強をしているとき」に充実感を感じている。アメリカの場合は,「最も重視する暮らし方」の設問と同様に,「社会への貢献」が重要な位置を占めている。チェコの場合は,「勉強をしているとき」に充実感を感じる大学生が比較的多い。この傾向は社会主義体制に決別し市場経済を導入している現在,自分たち大学生がこれからの国家を牽引していくという自覚の現れであると考えられる。

(7) 悩み事の有無

設問の内容は,「あなたは現在,悩みや心配事がありますか。」(Q17)である。表4から,日本の大学生は「就職」と「勉強」,さらには「お金」で悩んでいることがわかる。1993年に実施された「世界青年調査」での悩み事のトップは「お金」であったが,今回の調査ではトッ

表3 充実感を感じるとき (人数, %) N=2022

| 国名/項目 | 勉強 | 社会貢献 | スポーツ・趣味 | 友人・仲間 | 家族 | 一人のとき | わからない |
|-------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|
| アメリカ | 19(19.3) | 58(43.0) | 28(20.7) | 36(26.7) | 27(20.0) | 16(11.9) | 27(20.0) |
| フランス | 18(27.3) | 13(19.7) | 14(21.2) | 11(16.7) | 3(4.5) | 2(3.0) | 8(12.1) |
| チェコ | 37(41.1) | 14(15.6) | 3(3.3) | 6(6.7) | 8(8.9) | 5(5.6) | 20(22.2) |
| 中国 | 128(36.2) | 106(29.9) | 195(55.1) | 105(29.7) | 85(24.0) | 28(7.9) | 12(3.4) |
| 韓国 | 106(38.5) | 93(33.8) | 104(37.8) | 111(40.4) | 81(29.5) | 35(12.7) | 22(8.0) |
| 日本 | 235(21.3) | 266(24.1) | 864(78.4) | 801(72.7) | 286(26.0) | 198(18.0) | 39(3.5) |

表4 悩み事の有無

(人数, %) N=2021

| 国名/項目 | 勉強 | 進学 | 就職 | 友達 | 異性 | お金 | 性格 | 健康 | 家族 | 容姿 | その他 | 悩みなし |
|-------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------------|
| アメリカ | 47 34.6 | 9 6.6 | 38 27.9 | 19 14.0 | 25 18.4 | 41 30.1 | 16 11.8 | 22 16.2 | 21 15.4 | 12 8.8 | 13 9.6 | 16 11.8 |
| フランス | 9 13.6 | 4 6.1 | 24 36.4 | 1 1.5 | 6 9.1 | 7 10.6 | 5 7.6 | 2 3.0 | 3 4.5 | 2 3.0 | 3 4.5 | 5 7.6 |
| チェコ | 20 22.2 | 14 15.4 | 5 5.5 | 5 5.5 | 9 9.9 | 10 11.0 | 6 6.6 | 5 5.5 | 6 6.6 | 1 1.1 | 9 9.9 | 6 6.6 |
| 中国 | 152 43.2 | 37 10.5 | 119 33.8 | 44 12.5 | 33 9.4 | 41 11.6 | 60 17.0 | 47 13.4 | 22 6.3 | 14 4.0 | 68 19.3 | 25 7.1 |
| 韓国 | 116 42.0 | 61 22.1 | 150 54.3 | 50 18.1 | 76 27.5 | 100 36.2 | 67 24.3 | 53 19.2 | 53 19.2 | 43 15.6 | 21 7.6 | 5 1.8 |
| 日本 | 513 46.6 | 219 19.9 | 549 49.9 | 199 18.1 | 278 25.3 | 437 39.7 | 282 25.6 | 205 18.6 | 125 11.4 | 188 17.1 | 113 10.3 | 95 8.6 |

に「就職」がきている。これは現在の日本が非常に不景気な状態にあり、大学生にとって就職が切実な問題となっていることを示している。この傾向は他の調査対象国においても基本的にはほぼ同様であり、「就職」問題で悩んでいる大学生が多いのは、その背景に現在日本を始め全般的に景気が低迷していることが考えられる。

(8) 現在幸福と感じているか

設問の内容は、「いろいろ考えてみて、現在、あなたは幸福ですか。」(Q18)である。表5から、日本では82.0%の大学生が幸福であると感じている。その内訳は「幸福である」と答えた大学生が34.2%、「どちらかといえば幸福である」と答えた大学生が47.8%である。この傾向は外国の大学生の場合にも当てはまる。韓国の場合、幸福であると感じている大学生の割合は他の国より低く、76.7%である。しかも「幸福である」と回答した大学生の割合は19.6%とかなり低い数字である。しかしこの結果は「世界青年調査」の結果と大きく変わるものではない。

表5 現在幸福と感じているか

(人数, %) N=2009

| 国名/項目 | 幸福 | どちらかといえば幸福 | どちらかといえば不幸 | 不幸 | わからない |
|-------|-----------|------------|------------|---------|---------|
| アメリカ | 56(41.2%) | 70(51.5%) | 3(2.2%) | 2(1.5%) | 5(3.7%) |
| フランス | 21(31.3) | 38(56.7) | 4(6.0) | 2(3.0) | 2(3.0) |
| チェコ | 37(40.7) | 49(53.8) | 3(3.3) | 1(1.1) | 1(1.1) |
| 中国 | 104(30.7) | 186(54.9) | 25(7.4) | 8(2.4) | 16(4.7) |
| 韓国 | 54(19.6) | 157(57.1) | 36(13.1) | 14(5.1) | 14(5.1) |
| 日本 | 377(34.2) | 526(47.8) | 73(6.6) | 52(4.7) | 73(6.6) |

IV おわりに

大学生の生活意識に関して、これまでの分析や考察を通じて得られた知見を、日本と諸外国との比較の観点から要約すれば、以下の諸点が指摘できる。

日本の大学生は欧米に比較して、「授業に対する満足度」や「学習意欲」が低く、「自分の好きなように暮らす生き方」を望む傾向が強い。また、充実感を感じるのは、「勉学」よりも「スポーツや趣味」に打ち込んだり「友達や仲間といるとき」であり、悩み事では「就職」が最も切実な問題となっている。

ちなみに、これらの結果を11か国の青年（大学生を含む）を対象にした「第5回世界青年意識調査」の結果と比較すると、多少の差異はみられるものの、全般的にはほぼ同様な傾向を示している。したがって、以上述べてきた諸点は、日本の大学生にみられる特徴として捉えることができるものと考えられる。

また、各設問を分析した結果は、次のように整理することができる。

まず、大学の授業に対する満足度や在学中の学習意欲は、欧米で高くアジアで低い傾向を示すことから、我が国の大学は欧米の大学に学ぶ必要があるのではなかろうか。具体的には教員が授業内容や方法を改善し、向上させるために組織的な取り組み（いわゆるファカルティ・ディベロップメント）が強く求められている。

一方、友人関係については、欧米の大学生は積極的で異性も含めた友人関係が主であるが、アジアでは同性の友人関係に偏る傾向がみられる。国際化の進展とともに、男女共同参画社会の実現に向けて、大学の諸活動においても男女による共創的活動が、キャンパス内外で幅広く発展していくような環境づくりが必要である。

人生にとっての宗教の大切さに関しては、日本の大学生は「非常に大切」という項目では中国と並んで極めて低い数値を示しており、大学生の宗教離れの傾向を示している。我が国においては最近、「心の教育」ということが重要視されてきているが、大学教育にあっては、精神文化の形成や宗教的情操の陶冶について、人間学や死の教育などの教養教育を再構築し、人間教育のあり方を再考しなくてはならない。

さらに、現在の大学生には「自分の好きなように暮らす」という自己中心的な傾向がみられるが、その中で、アメリカにみられる「社会への貢献」を重視する方向が、高齢化が急速に進んでいる我が国には必要である。一例を挙げれば、ボランティア活動の単位化などの取り組みが、大学教育改革の一環として模索されなければならない。

また、我が国の学生は、諸外国に比較して勉学以外の場所で高い充実感を感じており、現在の大学生の大学教育に対する姿勢が改めて問われるといえよう。一方、悩み事の有無に関しては各国ともほぼ同様な傾向を示している。各国の大学生は全体的に幸福感を抱いており、現在の平和な社会を反映しているといえる。

最後に、今回実施した国際調査の限界と残された課題を提示しておきたい。第1は、調査の回答者数と回答者の国別分布に関する限界があることである。今回の有効回答者数をみると、特にフランスやチェコの標本数が不足しており、日本の回答者の地域分布にも偏りがみられる。第2は、国別の傾向に差異がみられたとしても、その違いの根拠を何に帰せばよいのかが特定できず裏付けが困難なことである。以上の点は、各国の共同研究者との討議を深めることや別の調査によって補完したい。

研究協力者（1997年4月1日現在）

| 国名 | 氏名 | 現職 |
|------|-------------------------|-----------------------------|
| アメリカ | 上田みどり | 広島経済大学助教授（ハーバード大学客員研究員） |
| フランス | Dr. Gilbert, Guillemoto | フランス EIL 事務局長 |
| チェコ | Dr. Jan, Sykora | カレル大学助教授（日本国際文化研究センター客員研究員） |
| 中国 | 金 龍哲 | 広島大学助教授 |
| 韓国 | 崔 烈呻 | 京畿大学教授 |

《注および引用文献》

- 1) 総務庁青少年対策本部編『世界の青年との比較からみた日本の青年－第5回世界青年意識調査報告書－』大蔵省印刷局，1994年。
- 2) 石黒彰二・酒井亮爾「青年の宗教意識に関する日米比較研究」『人間文化』創刊号，1984年，1－24頁。
- 3) 学生援護会編『日米大学生の生活実態と意識に関する調査』学生援護会，1990年。
- 4) 瀧本孝雄他「日米豪大学生の意識と行動に関する国際比較研究」『獨協大学教養諸学研究』第26巻，1992年，96－124頁。
- 5) 瀧本孝雄他「日米豪大学生の意識と行動に関する国際比較研究（2）」『獨協大学教養諸学研究』第28巻，第2号，1994年，49－68頁。
- 6) 棚原健次他「日本と韓国の青年の意識と行動に関する比較文化的研究（2）」『沖縄国際大学文学部紀要』第18巻，第1号，1991年，1－21頁。
- 7) 勝部伸夫「日韓大学生の意識調査」『海外事情研究』第21巻，第1号，1993年，77－101頁。
- 8) 井村修他「日本と韓国の青年の意識と行動に関する比較文化的研究（1）」『琉球大学教育学部紀要』第38集，1991年，347－360頁。
- 9) 高木秀明他「日中青年の自己意識，対人態度，親子関係に関する比較研究」『横浜国立大学教育紀要』第35集，1995年，1－18頁など，高木秀明他による一連の国際比較調査。
- 10) 見田宗介他編『社会学事典』弘文堂，1988年，517頁の定義による。
- 11) 『哲学事典』平凡社，1979年，622頁の定義による。
- 12) 属性に関する設問の一部は未記入であるが，属性以外の設問全部に回答した者も有効回答者数に含めているので，項目によっては総計が2039名にならない場合もある。
- 13) 文部省『大学改革の今後の課題についての調査研究』1995年1月。
- 14) 武内清「青年の友人関係，余暇，地域意識」『青少年問題』第43巻3号，1996年，37頁。
- 15) 瀧本孝雄他，前掲論文5），59頁。
- 16) 張日昇，高木秀明，「大学生の宗教態度と宗教観に関する日中比較研究」『横浜国立大学教育紀要』第29集，1989年，122頁。

An International Comparative Survey on Living-Consciousness among University Students

Etuji KOYAMA, Tsuneo AKAGI, Masaharu KONO, Seizou SAITOH*, Ryutetsu KIM**

Faculty of College of Liberal Arts and Science

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan

**Kibi International University*

***Hiroshima University*

(Received September 30, 1997)

The purpose of this study is to clarify the characteristics of Japanese university students compared with other countries for prospecting the future education. We tried to collect the data about six countries university students, the United State of America, the French Republic, the Czech Republic, the People's Republic of China, the Republic of Korea and Japan. In 1997, 2039 students responded to this questionnaire survey about their living-consciousness.

The responses to the questionnaire were analysed and compared with Japanese data. Findings obtained by these survey are as follows :

- ① There were remarkable difference in student's consciousness between the contries of Asia and the Europe.
- ② There were also remarkable difference in student's consciousness between under the political system of socialism countries and other liberalism countries. .
- ③ Japanese students have some characteristic tendencies compared with other countries about satisfaction of school teaching.

It is nessesary to inquire into the background of those results and to pursue more arguments to our conclusion.